

ダニエル書2章「王の見た夢」

1A 天の神による啓示 1-23

1B 解き明かせない知者たち 1-11

2B ダニエルの知恵と祈り 12-23

2A 人手によらない石 24-49

1B 終わりの日に起こること 24-30

2B 国と権威の破滅 31-45

3B 王の賛美 46-49

本文

ダニエル書2章です。私たちは前回、ダニエルと友人三人がバビロンに捕え移されて、そこで王に仕えるための教育を受けていたところを読みました。バビロンの王に仕える者たちとして、徹底したバビロン教育を受けましたが、王の食べるごちそうやぶどう酒によっては、主に対する自分の身を汚すとして、それを宦官の長に申し出ます。主が彼にダニエルに対する好意を与えてくださり、それでダニエルは自分たちに、十日間、野菜だけを食べさせて顔色を調べてくれと頼みます。彼らは、他の少年たちよりも顔だちもよく、体も肥えていました。主に仕え、そして王を尊ぶ彼らに対して、主はそれにふさわしい助けを与えられたのです。そして王の前に立った時、彼らには知識や文学を悟る力と知恵が他の呪法師や、呪文師よりも十倍もまさっていたことが分かります。2章において、その知恵がいかに優れているのか、またその知恵が神から来たものであることが証しされます。

1A 天の神による啓示 1-23

1B 解き明かせない知者たち 1-11

2:1 ネブカデネザルの治世の第二年に、ネブカデネザルは、幾つかの夢を見、そのために心が騒ぎ、眠れなかった。

前回の学びで、ダニエルと友人三人は、三年間の養育を受けたとありました。けれども、これは丸々三年ではなく、三年目ということでありましょう。2章の出来事は、ネブカデネザルの王の治世第二年ですから、養育期間が終わった直後に起こったものと考えられます。紀元前603年もしくは602年の出来事です。彼は、カルケミシュの戦いでエジプトと戦い、メソポタミア、パレスチナ地方、そしてエジプトに至る大きな地域を自分の支配下に入れました。そして父ナボポラッサルが死に、王に即位しました。父のものを受け継いで、この巨大な帝国を治めなければいけないという重責の中で見た夢です。主が似たようなことを、異邦人にしても、イスラエルにしても、王に対して行なわれましたね。エジプトのパロが、これから来る大豊作と大飢饉についての食料政策を立てることが

できるように、二つの夢を彼に見せました。ヨセフが解き明かしました。ソロモンが若年で王になった時に、主が知恵をお与えになりました。そして、一つ夢だけでなく、「幾つかの夢」を見ました。エジプトのパロと同じように、その夢が確かであることを主がお知らせになったのでしょう。

2:2 そこで王は、呪法師、呪文師、呪術者、カルデヤ人を呼び寄せて、王のためにその夢を解き明かすように命じた。彼らが来て王の前に立つと、2:3 王は彼らに言った。「私は夢を見たが、その夢を解きたくて私の心は騒いでいる。」2:4 カルデヤ人たちは王に告げて言った。・・アラム語で。・・「王よ。永遠に生きられますように。どうぞその夢をしもべたちにお話してください。そうすれば、私たちはその解き明かしをいたしましょう。」

1章の学びで説明しましたが、バビロンには「知者」と呼ばれる学者集団が王を取り巻いていました。実際は、呪法師、呪文師、呪術者など星占いをする人々です。王が彼らに夢の解き明かしを命じました。

そして、ここで大事な挿入句があります。「アラム語で」であります。古代シリア語です。日本語の聖書では、1章から12章まで日本語に翻訳されているので区別ができませんが、原本では1章はヘブル語、そして2章のこの部分から7章の終わりまでがアラム語、そして8章から再びヘブル語で書かれています。一つの書物を、ダニエルは二つの言語で書いたのです。非常に奇妙ですが、内容を読んでゆけば合点がいきます。ヘブル語はもちろん、イスラエル人が用いている言語です。そしてアラム語は当時、貿易する時に使われていた言葉です。国々の共通言語であり、今で言うならば英語です。ダニエルが言語を使い分けているのは、2-7章が、イスラエルではなく国々に対しての事柄になるからです。ネブカデネザルが見た夢が、イスラエルではなく、全世界に対する内容だからです。そして8章以降で、その世界の動きの中でエルサレムに帰還するユダヤ人がこれからどうなっていくのかについて、ダニエルは書き記しています。だからユダヤ人が読んで、聞くことができるようにヘブル語に戻したのです。

そしてこの「ヘブル語、アラブ語、再びヘブル語」という順番は、神が救いのご計画を進められる時の順番になります。主がイスラエルを選ばれ、イスラエルによってご自分を現されました。けれども、ユダヤ人が自分たちのメシヤを拒んだことによって、かえって福音が異邦人に広がりました。そして主は再びイスラエルを救われるのです。「ローマ 11:26 その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成がなる時までであり、こうしてイスラエルはみな救われる、ということです。」

2:5 王は答えてカルデヤ人たちに言った。「私の言うことにまちがいはない。もし、あなたがたがその夢とその解き明かしとを私に知らせることができなければ、あなたがたの手足を切り離させ、あなたがたの家を滅ぼしてごみの山とさせる。2:6 しかし、もし夢と説き明かしとを知らせたら、贈り

物と報酬と大きな光栄とを私から受けよう。だから、夢と説き明かしとを私に知らせよ。」

夢の解き明かしだけでなく、夢も教えなさいと言うのは、ネブカデネザルの心の中に、この夢はただ事ではない、確かなものであることを確かめなければいけない、いい加減な解き明かしではいけないと思ったのであろうと思われます。100 年の確証が必要だったのでしょう。そして手足を引き離させ、家を滅ぼしてごみの山とさせるというのは、

2:7 彼らは再び答えて言った。「王よ。しもべたちにその夢をお話してください。そうすれば、解き明かしてごらんにいれます。」2:8 王は答えて言った。「私には、はっきりわかっている。あなたがたは私の言うことにまちがいはないのを見てとって、時をかせごうとしているのだ。2:9 もしあなたがたがその夢を私に知らせないなら、あなたがたへの判決はただ一つ。あなたがたは時が移り変わるまで、偽りと欺きのことばを私の前に述べようと決めてかかっている。だから、どんな夢かを私に話せ。そうすれば、あなたがたがその解き明かしを私に示せるかどうか、私にわかるだろう。」

王に仕える呪法師や呪術師は、云わば「御用学者」のようになっていたのでしょう。王が恐ろしくて、王の意向にそぐわないことを話すことはしないという人々だったかもしれません。しかし、今回の件はこれまでにない、只事ではない夢であったと王は感じ取っているのです。その一方で、知者たちは釈明にならない釈明を続けて、そして夢を解き明かさなくてもよい時まで待っていたのです。後で見ますが、王に仕えますが自分のために仕えていた彼らと、真剣に王のためを思って仕えていたダニエルとの違いが出て来ます。ここにパウロの言葉を思い出します。「エペソ 6:6-7 人のごきげんとりのような、うわべだけの仕え方でなく、キリストのしもべとして、心から神のみこころを行ない、人にではなく、主に仕えるように、善意をもって仕えなさい。」

2:10 カルデヤ人たちは王の前に答えて言った。「この地上には、王の言われることを示すことのできる者はひとりもありません。どんな偉大な権力のある王でも、このようなことを呪法師や呪文師、あるいはカルデヤ人に尋ねたことはかつてありません。2:11 王のお尋ねになることは、むずかしいことです。肉なる者とその住まいを共にされない神々以外には、それを王の前に示すことのできる者はいません。」

王が詰め寄ったので、それで彼らは本音を明かします。しかし、それは真実をついていました。「肉なる者とその住まいを共にされない神々以外には、それを王の前に示すことのできる者はいません。」です。彼らは気づいていました、これは被造物を超えたところにある存在でなければ、そのようなことはできないということです。天の神であるからこそ、時空を超えて終わりの日に至るまでの事を初めから告げることができるのです。

これが、世の知恵の限界でした。このことを、新約時代においてもパウロが次のように言ってい

ます。「1コリント 2:6-8 しかし私たちは、成人の間で、知恵を語ります。この知恵は、この世の知恵でもなく、この世の過ぎ去って行く支配者たちの知恵でもありません。私たちの語るのは、隠された奥義としての神の知恵であって、それは、神が、私たちの栄光のために、世界の始まる前から、あらかじめ定められたものです。この知恵を、この世の支配者たちは、だれひとりとして悟りませんでした。もし悟っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。」私たちの伝える十字架の言葉は、世の知恵では決して測り知れないものです。

2B ダニエルの知恵と祈り 12-23

2:12 王は怒り、大いにたけり狂い、バビロンの知者をすべて滅ぼせと命じた。2:13 この命令が発せられたので、知者たちは殺されることになった。また人々はダニエルとその同僚をも捜して殺そうとした。2:14 そのとき、ダニエルは、バビロンの知者たちを殺すために出て来た王の侍従長アルヨクに、知恵と思慮とをもって応待した。2:15 彼は王の全権を受けたアルヨクにこう言った。「どうしてそんなにきびしい命令が王から出たのでしょうか。」それで、アルヨクは事の次第をダニエルに知らせた。

王にとっては、この夢が国の存亡にかかっている一大事だと思っていたかもしれませんが、それで、極端ですがそんな知者であれば要らないと怒り長けりました。そして、その執行者であるアルヨクに、ダニエルが「知恵と思慮とをもって応待した」とあります。1章においてもそうでありましたが、ダニエルはこのような理不尽な命令に対して否定的に反応していません。むしろ、王も侍従長も批判することなく、どうしてそんな厳しい命令が王から出たのかと尋ねました。私たちが上に立つ人に対する姿勢であります。寄り添い、相手の立場を敬って、その気持ちになって話を聞き、そして共に対策を考えるということでもあります。私たちはこのような否定的なことを言われる時に、自己防衛的、自己弁護的になって反発したくなりますが、そうではなく、常に自分のことではなく、他者のことを顧みるのです。このように知恵をもって尋ねたので、アルヨクも事の次第を順序立てて話すことができました。

2:16 ダニエルは王のところに行き、王にその解き明かしをするため、しばらくの時を与えてくれるように願った。

すばらしいですね、ダニエルは自分の命の危険を冒してまで、王のためを思って前に出ていきました。イラクにおいて、かつてサダム・フセイン大統領が統治していた時に、意外にその周辺にはキリスト者がいたそうです。ほとんど被害妄想状態であった独裁者フセインでしたが、周囲はただ自分を恐れているだけであったのに対して、キリスト者は確かに真実の中に生きていることを知っていたからではないかと言われていています。彼が、イスラエルを化学兵器で集中攻撃する計画を立て、側近の意見を聞いていきました。キリスト者の一人、空軍大将のジョージズ・サダは、イエス様に祈りました。まず軍の専門家として、その計画は成功しないことを知っていました。そしてキリス

ト者として、イスラエルを呪うような行為は避けなければいけないこと、またイスラエルは必ず反撃するだろうから、爆弾は中間地帯のヨルダンなどに落ちてその人々が被害にあう。それもクリスチャンとして許せないことでした。彼は結局、一時間半にも渡る自分の意見を述べたそうです。周りの人は、その場で彼の首が文字通り吹っ飛ぶと思っていました。けれども不思議にフセインは裁かなかったのです。現代版のバビロン、現代版のネブカデネザルとダニエルの話ですね。

2:17 それから、ダニエルは自分の家に帰り、彼の同僚のハナヌヤ、ミシャエル、アザルヤにこのことを知らせた。2:18 彼らはこの秘密について、天の神のあわれみを請い、ダニエルとその同僚が他のバビロンの知者たちとともに滅ぼされることのないようにと願った。2:19 そのとき、夜の幻のうちにこの秘密がダニエルに啓示されたので、ダニエルは天の神をほめたたえた。

緊急に祈り会を開きました。このような時に信仰の友がいるというのは、どんなに心強かったことでしょうか。彼らは、神の憐れみを請いました。すると天から幻のうちに秘密が示されたとあります。主は私たちのために、憐れみによって事を進めてくださいます。私たちの努力や願いではなく、もっぱら神の憐れみによります。そして神は、旧約時代だけでなく、新約時代にも幻や夢でお語りになります。五旬節が満ちた日に、聖霊が弟子たちに降りました。そして、ペテロはこれがヨエルの預言だと言いました。「神は言われる。終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたがたの息子や娘は預言し、青年は幻を見、老人は夢を見る。その日、わたしのしもべにも、はしためにも、わたしの霊を注ぐ。すると、彼らは預言する。(使徒 2:17-18)」

2:20 ダニエルはこう言った。「神の御名はとこしえからとこしえまでほむべきかな。知恵と力は神のもの。2:21 神は季節と時を変え、王を廃し、王を立て、知者には知恵を、理性のある者には知識を授けられる。2:22 神は、深くて測り知れないことも、隠されていることもあらし、暗黒にあるものを知り、ご自身に光を宿す。2:23 私の先祖の神。私はあなたに感謝し、あなたを賛美します。あなたは私に知恵と力を賜い、今、私たちがあなたにこいねがったことを私に知らせ、王のことを私たちに知らせてくださいました。」

先週の礼拝でお話したところですが、神は知恵と力の神であります。これから、王が倒れ、王が立つという幻を伝えます。それらをすべて神が行なわれていること、また知恵をもってそれらを行なわれている主権者であるということ、それを知ってダニエルは神をほめたたえています。そして、先の夢を示されなかった知者たちのように、人々の深くにある暗闇のところについて誰も悟ることができないものを、神が光に宿っておられるので、その光によって明らかにされています。そして、ダニエルはこの方が先祖の神、つまり、アブラハム、イサク、ヤコブの神であること、ご自分の約束を守ってくださる方であることを覚え、賛美しました。

ところで、ここでダニエルが賛美している内容は、かつての聖徒や預言者が語ったことの引用が

たくさんあると言われています。ほむべきかな、と言っているところは歴代第二 29 章 10 節、知恵と力が神にあるというところは、ヨブ記 12 章 13 節、王が立てられる、倒される、また暗黒にあるものを光に出すということは、ヨブ記 12 章 21-24 節にあります。彼は云わば、聖書に親しんでいた人で、御言葉の中に生き、また祈っていた人であります。イエス様の母マリヤのそうでした。彼女がイエス様を身ごもった時の賛歌は、サムエルを身ごもったハンナの賛美を初め、やはり御言葉が色濃く出たものであります。

2A 人手によらない石 24-49

1B 終わりの日に起こること 24-30

2:24 それからダニエルは、王がバビロンの知者たちを滅ぼすように命じておいたアルヨクのもとに行き、彼にこう言った。「バビロンの知者たちを滅ぼしてはなりません。私を王の前に連れて行ってください。私が王に解き明かしを示します。」2:25 そこで、アルヨクは急いでダニエルを王の前に連れて行き、王にこう言った。「ユダからの捕虜の中に、王に解き明かしのできるひとりの男を見つけました。」

ダニエルは、すばやく同業である他のバビロンの知者たちが殺されることがないように願っています。彼らがたとえ異教の知者であってもです。彼の態度に、ペテロ第一 2 章にあった言葉を思い出します。「2:17 すべての人を敬いなさい。兄弟たちを愛し、神を恐れ、王を尊びなさい。」そしてアルヨクはすでに、ダニエルを信頼しています。彼の事を王に話します。そして自分が見つけたと言って、さりげなくこれを自分のささやかな業績にしています。

2:26 それで王は、ベルテシャツアルという名のダニエルに言った。「あなたは私が見た夢と、その解き明かしを私に示すことができるのか。」2:27 ダニエルは王に答えて言った。「王が求められる秘密は、知者、呪文師、呪法師、星占いも王に示すことはできません。2:28 しかし、天に秘密をあらわすひとりの神がおられ、この方が終わりの日に起こることをネブカデネザル王に示されたのです。あなたの夢と、寝床であなたの頭に浮かんだ幻はこれです。2:29 王さま。あなたは寝床で、この後、何が起こるのかと思いを巡らされましたが、秘密をあらわされる方が、後に起こることをあなたにお示しになったのです。2:30 この秘密が私にあらわされたのは、ほかのどの人よりも私に知恵があるからではなく、その解き明かしが王に知らされることによって、あなたの心の思いをあなたがお知りになるためです。

ダニエルは、真実に、真心から王に仕えている、主なる神のしもべであります。一つに、彼は自分の手柄のことは、全く気にしていません。そのようなものには関心がありませんでした。王が、「おまえが、解き明かしをできるのか？」と尋ねたら、ダニエルはすかさず神がおられて、この方がなさっているのだと答えています。そして、他の知者によりも知恵があるからだということではなく、「あなたの心の思いをあなたがお知りになるため」と言っています。王のために、王が心の思いが

何であるかを知るために、神が示されたのだと、王のために思って話しています。

そして、ダニエルは天の神がそれを示しておられるということを包み隠さず、伝えました。事実、これはとてつもなく大きな幻であり、当然ながら、地上に宿る神々、つまり異教の神々には知られないものであったわけです。「天に秘密をあらわすひとりの神」と、「天の神」であることをはっきりと伝えています。詩篇の著者は、偶像の神々とイスラエルの神との違いをこう言いました。「115:2-3 なぜ、国々は言うのか。「彼らの神は、いったいどこにいるのか。」と。私たちの神は、天におられ、その望むところをことごとく行なわれる。」私たちは、キリストを主と心で仰ぎ、説明を求められた時にその希望について弁明しなさいとペテロ第一にあります。キリスト者であること、キリスト者として何を信じて、考えているか、その信仰を殊更に隠すことなく、説明します。

そしてここで大事なのは、この夢が「終わりの日に起こること」「後に起こること」だということです。つまり、バビロンの王から始まって終わりの日に至るまでの夢であったのです。そしてダニエル書を読み進めると、この内容がさらに発展し、詳細に啓示されています。バビロンという昔のこの話ではなく、現代に至り、そして主が再臨される将来にまでつながる鳥瞰的な幻です。

2B 国と権威の破滅 31-45

2:31 王さま。あなたは一つの大きな像をご覧になりました。見よ。その像は巨大で、その輝きは常ならず、それがあなたの前に立っていました。その姿は恐ろしいものでした。2:32 その像は、頭は純金、胸と両腕とは銀、腹とももとは青銅、2:33 すねは鉄、足は一部が鉄、一部が粘土でした。2:34 あなたが見ておられるうちに、一つの石が人手によらずに切り出され、その像の鉄と粘土の足を打ち、これを打ち砕きました。2:35 そのとき、鉄も粘土も青銅も銀も金もみな共に砕けて、夏の麦打ち場のもみがらのようになり、風がそれを吹き払って、あとかたもなくなりました。そして、その像を打った石は大きな山となって全土に満ちました。

これが夢であります。人の像であり、その金属は頭からつま先まであり、その輝きは次第になくなっていきます。最後は、鉄と粘土の混じった状況になります。そして、「一つの石が人手によらずに切り出され」て、それがその足の部分に当たり、全てが粉々になります。そしてその石が大きな山となります。人の像も目を引きますが、ここでのクライマックスは何と言っても、この石です。



2:36 これがその夢でした。私たちはその解き明かしを王さまの前に申し上げます。2:37 王の王である王さま。天の神はあなたに国と権威と力と光栄とを賜い、2:38 また人の子ら、野の獣、空の鳥がどこに住んでいても、これをことごとく治めるようにあなたの手にも与えられました。あなたはあの金の頭です。2:39 あなたの後に、あなたより劣るもう一つの国が起こります。次に青銅の第三の国が起こって、全土を治めるようになります。2:40 第四の国は鉄のように強い国です。鉄はすべてのものを打ち砕いて粉々にするからです。その国は鉄が打ち砕くように、先の国々を粉々に打ち砕いてしまいます。

この人の像は、人による統治、人間の国を表していました。金銀、青銅、鉄は、その権力や栄光を表していました。人々の国々の中で第一のもの、それがバビロンです。金で輝き、しかも頭になっているのがバビロンです。ダニエルは、「天の神はあなたに国と権威と力と光栄とを賜い、また人の子ら、野の獣、空の鳥がどこに住んでいても、これをことごとく治めるようにあなたの手にも与えられました。」と言っています。これらの権威と力と光栄は、ネブカデネザルのものではなく天の神のものである。この方が主権をもって彼を立たせておられるということです。ここにあるように、人々がそれに従っているだけでなく、動物までもが従っているとあります。バビロンの権力は、動物の世界にも影響を与えるほどの広がりを持つていたということです。

そして、銀の両腕と胸ですが、これは「あなたより劣る」国であるとあります。紀元前 539 年に、バビロンがメディア・ペルシヤの連合軍に倒れます。それがダニエル書 5 章にあります。そしてクロス王がペルシヤの初代王として帝国を始めます、536 年のことです。ペルシヤの国は、法令が重んじられました。王をもってしても、それを変えられない法令でありました。権力が王の中に少しなくなっていました。そして、青銅の腹と太ももですが、これはギリシヤです。紀元前 330 年から始まりました。アレキサンダー大王が、当時知られていた世界を制覇しました。だから、ここでダニエルが「全土」と解き明かしています。具体的にはヨーロッパ、そして南下してパレスチナ、エジプトまで征服し、そしてペルシヤを破り、遥かインドまで東方遠征を行ないました。

そして、紀元前 63 年に、ギリシヤに代わってローマが世界を制覇しました。「鉄のように強い国」とあります。ローマはその反逆者に対する鉄のような破壊で有名です。ヨセフスも「ユダヤ戦記」の中でローマ軍がいかにもその組織、訓練、指揮において優れていたかを述べています。このようにして、バビロンを初めてとする人間の国、異邦人の時代は、鉄の支配による空前の世界帝国となります。

そして思い出していただきたいのですが、そのローマ時代にキリストが来られたということです。そして、鉄の支配の後には、鉄と粘土という状態になります。人の歴史において、イエス・キリストが来られ教会が誕生したという事実によって、人間の世界支配が瓦解し始めた、とすることができるのです。ダニエル書は、実に旧約から新約への橋渡しをする預言の幻です。そしてキリストが来ら

れたことによって、ある意味で人間の支配の終わりが始まったと言えるのです。ですからイエス・キリストの教会は、神の国を霊的にこの地上に介入せしめる「世の光」であり「地の塩」であります。キリストの教会は、この世においてはちっぽけで、力がなく、卑しくさえ見えます。けれどもイザヤなどが語ったように、その貧しい者、弱い者が、そびえ立つ都を引き倒し、踏みつけるのです(イザヤ 26:5-6 参照)。

2:41 あなたがご覧になった足と足の指は、その一部が陶器師の粘土、一部が鉄でしたが、それは分裂した国のことです。その国には鉄の強さがあるでしょうが、あなたがご覧になったように、その鉄はどろどろの粘土と混じり合っているのです。2:42 その足の指が一部は鉄、一部は粘土であったように、その国は一部は強く、一部はもろいでしょう。2:43 鉄とどろどろの粘土が混じり合っているのをあなたがご覧になったように、それらは人間の種によって、互いに混じり合うでしょう。しかし鉄が粘土と混じり合わないように、それらが互いに団結することはありません。

ローマ後の世界です。ローマは滅びましたが、その影響を持っているのを「粘土と鉄が混じり合った」状態として形容しています。ダニエルは「分裂した」と言っていますが、紀元 364 年、西ローマと東ローマに分裂しました。西ローマは 476 年まで続きましたが、その後、西ヨーロッパの国々においてその影響は続いています。フランスでは紀元 800 年に、自らの支配権を「フランス・聖ローマ帝国」と呼びました。同じようにドイツは、指導者らが自分への称号を「カエザル」と付けました。東ローマは 1453 年まで続きましたが、その影響はロシアに移っています。そこでも国王は自らを「ツァー」つまり「カエザル」と名づけ、ローマ帝国主義の伝統を受け継ぎました。それがソ連になり、共産主義を通して勢力を拡大し、ソ連崩壊後もロシアはかつての強国の地位を得るべく動き始めています。

そしてダニエルはさらに、足と足の指を詳しく解き明かしています。足の指はもちろん十本です。そして、ダニエル 7 章には第四の獣が十本の角を持っています。それが「十人の王(24 節)」であるという解き明かしです。けれども、鉄と粘土が混じり合わないように、互いに団結することはないとダニエルは言っています。「人間の種」つまり人間が作為的に世界を一つになるのですが、十人の王、あるいは支配の中で置かれ、それぞれは互いに団結することができない、という状態です。

これが、私たちがいま自分たちの時代に見ている世界です。グローバル化であります。これは近代から始まりました。欧米列強によってその波が極東にまで押し寄せ、日本はアメリカからの黒船によって開国を迫られました。そして間もなくして世界大戦です。もう一度世界大戦が起きました。まさにイエス様の言われた、「国は国へ、民は民に対抗する」時代であります。そして日本が連合軍に敗戦して、国際連盟が国際連合になりました。それぞれの国が互いに条約を結んだりして団結しようとはしますが、完全にはできません。共産主義者は、国際主義といって国々の垣根をなくして世界革命を起こそうとしましたが、失敗に終わりました。しかしその後、グローバル化は止まるこ

となく、今に至っています。特に、ローマの発祥地である欧州において連合があります。通貨が統一されました。そして彼らはいずれ政治統合しようと目指しています。アメリカ合衆国のように、ヨーロッパ合衆国を目指していました。今、アメリカがグローバル化に反抗、そして英国が欧州連合から離脱意思を、去年示しました。

2:44 この王たちの時代に、天の神は一つの国を起こされます。その国は永遠に滅ぼされることがなく、その国は他の民に渡されず、かえってこれらの国々をことごとく打ち砕いて、絶滅してしまいます。しかし、この国は永遠に立ち続けます。2:45 あなたがご覧になったとおり、一つの石が人手によらずに山から切り出され、その石が鉄と青銅と粘土と銀と金を打ち砕いたのは、大いなる神が、これから後に起こることを王に知らされたのです。その夢は正夢で、その解き明かしも確かです。」

ネブカデネザルの見た夢のクライマックスです。これまでの人の像の輝きを、一つの石がことごとく打ち砕いて、全滅してしまいます。そしてこの石は全土を覆う大きな山となるのでしたね。この石による国が、人間の国に代わって世界を支配するのです。そしてこれは「永遠」です。これこそが神が支配される国、神の国です。

石が「人手によらずに切り出され」た(34 節)と教えています。キリストが神から来られた方であり、人の手によるのではないということです。この方が生まれたのは、聖霊によってみごもった処女マリヤによってでした。イエス様は、このことを思って、「御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。(マタイ 6:10)」と言われました。ユダヤ人の宗教指導者に対して、「家を建てた者たちの見捨てた石、それが礎の石となった。(ルカ 20:17)」と、詩篇 188 篇のメシヤ預言を引用され、彼らのご自分を捨てることを言われましたが、しかし、「この石の上に落ちれば、だれでも粉々に砕け、またこの石が人の上に落ちれば、その人を粉みじんに飛び散らしてしまうのです。(20:18)」と言われて、ここのダニエル書 2 章の幻を言及されたのです。

いかがでしょうか、ダニエルが知恵と力の神をほめたたえたように、私たちもほめたたえないでいられるでしょうか？ 捨てられた石が礎石となりました。私たちはこの石の上に霊の家として立っています。どんなにみすぼらしく見えても、いや、私たち自身がその高ぶりの心、魂がこの石によって砕かれて、主の前に出ています。そして人間の歴史の中で、いろいろなことが起こっても、世の中がどのよになっても、私たちは礎石の上に建てられている家です。イエス様は、御言葉を聞いて、それを行なう者は岩の上に建てた家のようなと言われました。洪水が来ても、崩れることはありません。そして、教会は福音にあって勝利し、天に引き上げられます。そして地上に神の怒りが下り、キリストが地上に現れます。教会も栄光のうちにキリストと共に現れます。そして、ここに描かれている御国の中に住むのです。

私たちの目は、粘土と鉄の混じり合ったような混沌としているところを見るのではなく、王を倒し、王を立て、時と季節を変えられるところの天の神の支配を見えています。ですから、いつも、「これがない、あれがない」という不満を鳴らすのではなく、「神がこのことをしておられる、あのことをしておられる」と、その御手を見て喜んでいくべきなのです。

3B 王の賛美 46-49

2:46 それで、ネブカデネザル王はひれ伏してダニエルに礼をし、彼に、穀物のささげ物となだめのかおりとをささげるように命じた。2:47 王はダニエルに答えて言った。「あなたがこの秘密をあらわすことができたからには、まことにあなたの神は、神々の神、王たちの主、また秘密をあらわす方だ。」2:48 そこで王は、ダニエルを高い位につけ、彼に多くのすばらしい贈り物を与えて、彼にバビロン全州を治めさせ、また、バビロンのすべての知者たちをつかさどる長官とした。2:49 王は、ダニエルの願いによって、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴに、バビロン州の事務をつかさどらせた。しかしダニエルは王の宮廷にとどまった。

異教の王、多神教の神々を拝む王ならではの反応です。ダニエル本人に対して、捧げ物をささげるように命じています。新約聖書では、使徒ペテロに対して百人隊長コルネリオが、ひれ伏してペテロを拝もうとした時に、「私も同じ人間です。」と言って断ったのを見ます。天の神を知らない人々は、このように創造主ではなく、用いられる器をそのまま拝む傾向があります。しかし、正しい発言もしていますね。あなたの神は、神々の神、王たちの主、秘密をあらわす方とっています。ダニエルの言っていること、その証しに正しく答えたのです。

そして、ダニエルを王は高い位に付けています。全州を治めさせて、知者たちをつかさどる長官としています。そしてダニエルも、三人の友人をバビロン州でつかさどる務めをさせていただけるよう王に願いました。キリスト者は、このように高い位について良いのです。あるキリスト教団体の方が、こう言いました。「キリスト者は、世の中で偉い人にならないといけない。」これは、一見、世的に聞こえるかもしれませんが。けれども、会社や組織において、間違っていることが行なわれていることを指摘し、組織とぶつかっても、対立が生じるだけで、何か良い物がそこから出て来ません。しかしダニエルと同じように上に立つに仕え、寄り添い、その人の益になることを、心を込めてするのであれば、信頼を勝ち得て、それから高い地位に着くことができたなら、これが正しいことをすることができます。主の御心にかなうことだと思われることを行なう権限が与えられるのです。

ここで起こっていることは凄い事ですね、ヨセフがエジプトにおいて総理大臣になった以上の事があります。エルサレムをこれから破壊するネブカデネザルが、当のバビロンの都では、宮廷の知者たちの長となった、エルサレムの神を信じるダニエルがおり、バビロン州にも三人の信者が仕えているのですから。これだけ見ても、天の神が神殿破壊を含めて全てを支配しておられることが分かります。